日本天文学会早川幸男基金渡航報告書

2005 年 9 月 10 日採択

申請者氏名	**後藤友嗣 (会員番号 4171)**
連絡先住所	〒 229-8510 神奈川県相模原市由野台 3-1-1
所属機関	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究本部 赤外サブミリ波天文学研究系
職あるいは学年	宇宙航空プロジェクト研究員
任期 (再任昇格条件)	3 年 (再任不可)
渡航目的	研究集会での口頭発表
講演・観測・研究題目	Environmental Effects on Galaxy Evolution based on the Sloan Digital Sky Survey
渡航先 (期間)	チリ (2005 年 12 月 4 日〜12 月 10 日)

30 時間に及ぶフライトを経て、くたくたになった私はチリのサンチアゴ空港に降り立った。空港には世界各地からの天文学者がすでに集っており、私は見慣れない空港に右往左往する間もなく送迎のシャトルに押し込められ、会場のホテルまで連行された。ESO 主催の研究会、”Groups of galaxies in the nearby Universe”の幕開けである。

過去に何度か国際研究会には参加したが、今度の様に全く知り合いのいない研究会は初めてであった。日本人はもちろん私一人で、スペイン語の分からない不安も相まって緊張して会議初日に臨んだが、そんな不安は最初のコーヒーブレイクで消し飛んだ。会議の参加者が私の事を知っているのである。「君の論文は読んだよ」「君があの論文の著者か」と次々に挨拶され度肝を抜かれてしまった。自分自身の方でも、昼食や夕食で一緒のテーブルについた参加者の名札を見ていると聞いたことのあるような名前の人が多いことに驚いた。よくよく思い出してみるといずれも自分が論文で引用したり、自分の論文を引用した論文の著者らであった。論文でしか名前を聞いたことのない研究者に、お互いの母国ではない国で初めてあって、初対面ながらまるで昔からお互いの事を知っていたかのように交流を深められる。非常に奇妙な国際交流体験であり、また同時に大変嬉しい経験でもあった。日頃研究生活での様々な苦労も報われる思いである。また一方で、これほど知り合いが多くいたことは、研究会が私が過去数年にわたって研究を続けてきた銀河グループにテーマを特化したものであったことの裏返しでもある。その様な研究会を開いてくださった ESO の皆様、並びに私の渡航を援助してくださった、日本天文学会早川幸男基金に深く感謝したい。

私自身の口頭発表は会議初日にあったが、その発表が概ね上手くいったようであるということが実感されたのは 2 日目以降であった。発表者が次々と私の発表内容を引用して下さったからである。特に、この分野で世界的な理論家の方が私の観測の結果を引用してくださったり、また会議のサマリーで私の結果を取り上げていただいた事は大変な名誉であった。また自分自身の発表以外でも、他の研究者の発表に対して頻繁に質問をぶつけられたのも自分にとって大きな収穫であった。分野が自分の専門に限られていたため、自身

にも少なからぬ予備知識があり、疑問に思ったことをその場でどんどん聞くことができたのは、自分自身の理解の助けにもなり、また議論の発展にも繋がったと思う。中にはつまらない質問もあったかもしれないが、時に私の質問に聴衆が頷いているのが実感されるのは至福の瞬間である。

真夏にもかかわらず真っ白な雪を頂いたアンデスの山々はそこはかとなく美しい。会議全体を通して、私は現在のこの分野での未解決問題を整理し、また私自身の研究を発展させる方向についても有意義な議論を交わしてくることができた。これからも精力的に研究を行って、また次の機会に名前だけしか知らない奇妙な友人たちと再会することを誓って、アンデスの山々に別れを告げた。

図 1: 会議中の食事風景。左より Dr. Chris Conselice、筆者、 Dr. Sang-Chul Kim。